40　『瀧澤路女日記』（1849）にみる母親による看病の実態

平尾真智子
健康科学大学

江戸時代の看病の実態を知る手がかりの一つとして「日記」史料がある．日記による看病の実態に関して筆者は小林一茶『看取り日記』の分析を行なっている（『看護歴史研究』8号，2016）．一茶は医薬に関する知識の少ない一般人として父親の看病にかかわっており，日記における看病に関する記載は多くはなかった．今回，瀧澤馬琴の長男の嫁，路による日記のなかに息子（22歳）の看病内容が記載されていることがわかった．その看病内容を分析し，江戸後期の家族による在宅での看病の実態を明らかにする．

研究資料には瀧澤路著，柴田光彦・大久保恵子編，瀧澤路女日記，上巻，中央公論社，2012．所収の「嘉永二年己酉日記」のうち，6月1日から息子死亡の10月9日までの約4ヶ月の記載文（11–93頁）を用いた．

瀧澤路（1805–1863）は馬琴の息子である医師宗伯の嫁で，土岐村元立（紀伊藩家老の侍医）の三女である．『瀧澤路女日記』は馬琴が記載した『曲亭馬琴日記』（嘉永2年5月終了）に引き続き，6月より，路自身が記録した日記で，後年『路女日記』と呼ばれるようになった．嘉永2年6月より，安政5年12月までの約10年間の日記である．これらのうち，長男太郎（1828–1849）の看病内容を母親である路自身が綴っている6月1日から太郎死去の10月9日までのものを分析した．日記には看病以外の日々の様子が記載されているが，看病の実態を知るという目的から，看病に関する部分を選択して分析した．太郎は路の長男であり，馬琴の孫である．持筒組同心を務めていたが，弘化3（1846）年12月に手足に痛みが生じ歩行不自由になった．翌年5月まで病気休職し，一時復職したが同9月より，再度休職となった．嘉永2年6月に退役し，同10月9日に自宅で死去した．

太郎の症状は足痛，口中痛，胸痛，腹満，尿量減少，口渇，発熱，水瀉，痛みによる不眠などで，医療として，発病から漢方医6人，針医1人に受療している．このうち，最期の三ケ月を診療した田村宗哲は最終的に脱疽，と診断している．治療は，煎薬，膏薬が主で，他に布薬，ねり薬，丸薬，針，灸，蛭が用いられている．民間療法として，なめくじ，たにし，芭蕉，桑の葉などが用いられている．神仏への祈願として，妻恋稲荷，富士講に祈願し，小日向大日如来，媼神，天王様への祈願も行なっている．売卜も利用している．

看病内容としては，三度の食事（麦飯，粥，握飯，麺類）をつくる，大小便の介助（虎子，竹筒の使用），身体を撫で擦る，見舞人対応（面談，将棋，書の読み聞かせ），煎薬つくり，膏薬の張替え，布団の取替え，などがある．その他に，食事の摂取状況，大小便，容態の観察，記録，医師への「容態書」作成，薬取り人足の手配，好物の買物などがある．髪を結う以外に，清潔を保つ行為の記載はない．看病人は主に母親である路，同居の妹さち，他家養女の妹つぎなどである．『瀧澤路女日記』の医療・看病資料価値として，病人の病状，対処法，観察項目などが，看病人自身の目で発病から終末まで経過をおった形で記載されていることにある．また作者路は医師の娘であり，夫も医師で舅も生薬屋を営み，医薬に関する素養・知識があった．さらに夫宗伯，舅馬琴の看病，看取りも体験している．

この日記に記載された母親路を主とする家族による看病の内容は，飲食，排泄，マッサージ，見舞人対応（面談，将棋），医師依頼，薬手配，製薬，膏薬張替えなどであった．衣服・下着の交換や洗面，髭剃り，手洗い，体を拭く，歯の手入れ，爪切りの援助などに関する記載はみられなかった．これらの行為はあまりにも日常的で記載するほどの事項ではなかったと想定される．また，咳や痰で呼吸が苦しく声が出ないなどのときの対処方法の記載はない．「吸引」の技術がまだない時代の限界といえる．さらに痛みによる夜間の不眠に対しては対処法がなく看病人も不眠になり，明け方に眠るしかなかったなどの実態が明らかになった．